



TITLE:

京大広報 No. 388

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 388. 京大広報 1990, 388: 883-900

ISSUE DATE:

1990-04-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209289>

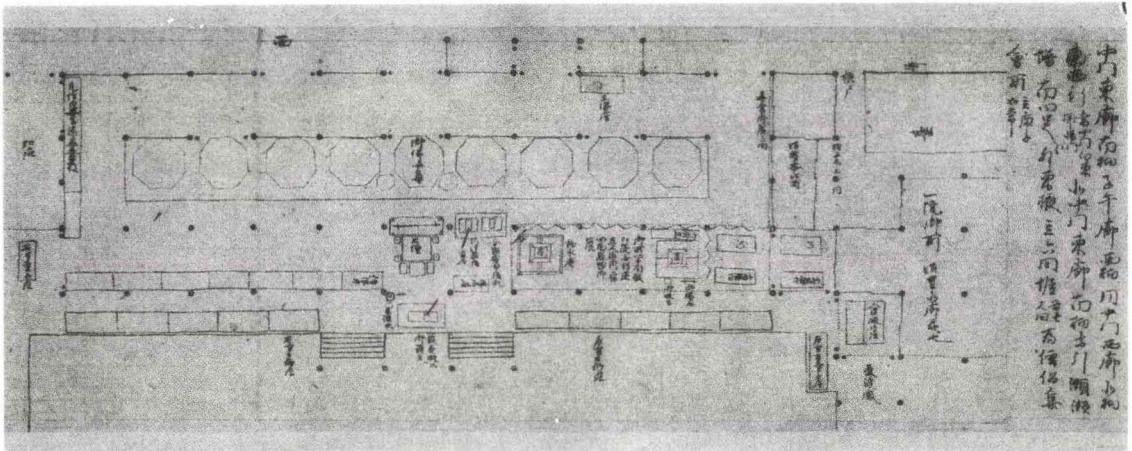
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 388

京都大学広報委員会



兵部卿平信範の日記『兵範記』（重要文化財・京都大学附属図書館蔵）仁平2（1152）年8月28日の条に描かれた福勝院の九体阿弥陀堂（京都大学教養部構内南部一帯にあったと推定されている）
—関連記事本文 896 ページ—

目次

修士学位授与式における 総長のことば 卒業式における総長のことば 総長 西島 安則..... 884 総長 西島 安則..... 888	計 報..... 895
＜大学の動き＞ 平成元年度修士学位授与式..... 892 平成元年度卒業式..... 892 部局長の交替等..... 892 平成2年度医療技術短期大学部 入学試験の結果..... 893 平成元年度医療技術短期大学部の 卒業式・修了式..... 893 平成2年度入学者選抜学力試験の結果..... 894 経済研究所 青木昌彦教授が 日本学士院賞を受賞..... 895	＜紹介＞ 埋蔵文化財研究センター..... 896 ＜資料＞ 平成元年度京都大学職員研修実施状況..... 897 平成元年度学生生活実態調査報告..... 897 ＜随想＞ 退職して3年 名誉教授 三木 晴男..... 899 ＜コラム＞ 研究手探りのころ 原子エネルギー研究所教授 岩崎 又衛..... 900 写真集企画委員会からのお願い..... 900

修士学位授与式における総長のことば

平成2年3月23日

総 長 西 島 安 則

本日ここに名誉教授の先生方の御臨席を賜り、各研究科長、部局長の先生方、教職員の皆様と共に平成元年度修士学位授与式を挙行し、文学研究科62名、教育学研究科18名、法学研究科15名、経済学研究科21名、理学研究科161名、薬学研究科36名、工学研究科584名、農学研究科143名、合計1,040名の諸君に修士の学位を授与することができました。

新修士諸君、おめでとう。

昭和28年(1953)本学に新制度による大学院が開設され、大学院修士課程が開講しました。昭和30年(1955)3月にその第1回修士学位授与式が行われました。そのとき修士の学位を授与されたのは285名でした。その後、新制大学院は成熟し、特に修士課程への進学は年々増加し、今日のわが国社会で極めて重要な高等教育課程として定着、充実いたしました。今日新たに修士の学位を取得されました諸君を加え、これまでに26,010名の修士の諸君を本学は社会に送り出しました。

2年前の春(昭和63年4月11日)、諸君を大学院に迎える入学式におきまして、私はマイケル・ファラデー(Michael Faraday, 1791~1867)のことについて話しました[『京大広報』No.351, 1988.5.1]。彼が英国の王立研究所(Royal Institution)の研究室の実験助手として採用されたのは1813年で22歳の時でした。私はその王立研究所で彼の作ったいろいろの手作りの実験装置や実験ノートを見た時の感激を話し、学ぶ意欲について述べました。ファラデーが1831年に電磁誘導現象を実験によって発見し、電気と磁気の相互作用についての画期的な手がかりをつかんだとき、彼は電気、磁気、光、熱というものが本質は一つで、ただ違った現れ方をしているのではないかということを感じ、「これで将来その完全な理解に導く鍵を私は手に入れたと思う。」とノートに書きました。

今日は諸君の修士学位授与式で、私は諸君に2年前の大学院入学式でお話した続きを話してみたいと思います。もちろん、ここで電磁気学や電磁波の講義をしようというわけではありません。今日は、ファラデーが電磁誘導現象を発見した、その年、1831年に生まれ、半世紀後にファラデーの持っていた夢を立派に完成したジェームス・クラーク・マクスウェル(James Clerk Maxwell, 1831~1879)について語りたいと思います。

マクスウェルは1831年(天保2年)スコットランドのエディンバラ(Edinburgh)に生まれました。彼は小さい時から数学、特に幾何に天才的な才能をあらわしました。また、自然現象に強い興味を持っていろいろの実験をしていました。しかし、天才といわれる人がよくそうであるように、子供のなかでは多少変わった所があったのでしょう、仲間からはダフティー("Dafty")とあだ名されていたということです。

いろんな楕円を描くのに二つの点に糸の両端を固定して鉛筆の芯をその糸にかけて回すときれいに描けることを、みんな知っていると思います。このダフティーはそれを15歳になるまでに自分で発見しました。「卵形線並びに複焦点を持つ曲線について」という論文を書き、エディンバラ王立協会に提出しました。それは“Proceedings of the Royal Society of Edinburgh”に掲載されました。このような方法は、それ以前にすでにデカルト (René Descartes, 1596~1650) によって見出されていたということが後になってわかりましたが、15歳の少年が全く独自にこのような方法を案出したことは、当時、アカデミーの大変な評判になりました。

16歳の時にマクスウェルはエディンバラに住んでいる老物理学者ウィリアム・ニコル (William Nicol, 1768~1851) 先生のお宅へ連れて行ってもらい機会がありました。ニコル先生は有名な“ニコルのプリズム”を発明した物理学者ですが、その時はもう80歳になろうとしていました。ニコル先生はこの少年を自分の自宅の実験室に招き入れて、偏光プリズム (ニコルのプリズム) を使ったいろんな光学実験をして見せました。知っている諸君も多いと思いますが、偏光を使うと無色透明のものもその内部の歪みなどによって美しい色模様 (偏光色) が見られます。マクスウェル少年は光の不思議さにすっかり魅了されました。さらに彼を有頂天にしたのは、それから数日後、ニコル先生から一對の貴重な“ニコルのプリズム”を小包で受け取ったことです。老物理学者ニコルは、このマクスウェル少年の目の輝きに、この少年が将来この不思議な光の本性を解明してくれる人物であることを予見していたのかもしれない。

マクスウェルは早速“ニコルのプリズム”を使ってガラスやゼラチン膜の観察をし、そこに現れた偏光色を水彩画で図表に書き、変形と偏光色の関係を論文にまとめてエディンバラ王立協会で発表しています。それは「光弾性法」であります。エディンバラ大学 (University of Edinburgh) を経て、1850年、19歳の時ケンブリッジ (Cambridge) へ進みました。そしてトリニティー・カレッジ (Trinity College) に学ぶことになりました。恥ずかしがりやで、多少変わった所のある学生でしたが、彼の数学における才能は間もなく多くの学者仲間でも認められました。彼は数学、物理だけではなく、ありとあらゆる分野に強い興味を持ち、その頃に彼はアンダーグラデュエイトの中の天才と認められていました。面白いことに、彼は視覚にうったえるような幾何学的方法で考察を進めることが得意で、抽象的な解析的方法は不得手でした。

1856年、彼の父の病気が重くなり、故郷へ帰り、25歳でアバデーン (Aberdeen) のマリシャル・カレッジ (Marischal College) の自然哲学の教授になりました。その頃、土星の環についての論議が盛んでした。彼は土星の環を一体のものではなくて、多くの粒子からなるとして、それらが異なった速度で回転し、土星本体との相互作用によって全体として安定にこのような環を形作っているための条件を導き出しました。これは当時の数理物理学の顕著な成果であります。

1860年、ロンドンのキングスカレッジ (King's College, London) の自然哲学・天文学の教授になりました。1865年にこの職を辞めるまでの5年間、29歳から34歳までの間が、マクスウェルの人生の中で最も学問的に実りの多い時期となりました。この間に、色の混合と光学についての研究を進め、「三

原色理論」を完成しました。また、ファラデーの電気と磁気についての実験的研究の理論的發展に没頭し、「電磁場の理論」を確立しました。さらに、「気体分子運動論」の理論とその実験的証明に重要な成果を挙げました。1865年にスコットランドへ帰って、家にこもって彼の電気と磁気についての大著 *A Treatise on Electricity and Magnetism* の執筆にあたりました。その初版は1873年に出版されましたが、この大著によって電気と磁気、そして光と熱の全てが統一的に理解され、19世紀の物理学の大成果を果たしたのであります。

マクスウェルのこの気体分子運動論に刺激され、彼と共にこの分野を開拓したボルツマン (Ludwig Boltzmann, 1844~1906) は、マクスウェルのこの問題の解決への天才的な取り組みを次のようにミュージカルドラマにたとえて表現しています。

“はじめにヴェロシティ (Velocities) のヴァリエーション (Variations) が荘重に登場する。そしてやがて舞台の一方から状態方程式が、そして反対の方から運動方程式が舞台の中央へと進む。そして公式のカオスが高潮した舞台にみなぎる。すると、突然どこからともなく「 $n=5$ とせよ」という言葉が響きわたり、悪魔の精Vが消えて、それまで舞台を圧倒して轟いていたバスのパートが急に静かになる。それはあたかも魔法使いの杖で、どうしようもなかった全てをなぎ倒したような静けさである。そしてやがて次から次へと優しい公式があらわれてきて、舞台は予想もしていなかったクライマックスへと展開する。そこで熱平衡が現れて、そしてカーテンは降りた。”

もう60年程前のことになりますが、1931年10月1日、2日の両日、ケンブリッジ大学でマクスウェルの生誕100年の式典が催されました。その式典の詳しい記事がその頃の学術雑誌“*NATURE*”に載っております。その式典には J.J. トムソン (Joseph John Thomson, 1856~1940)、マックス・プランク (Max Planck, 1858~1947)、アインシュタイン (Albert Einstein, 1879~1955)、ジーンズ (James Jeans, 1877~1946) などの20世紀の物理学を確立するのに重要な貢献をした学者達が集い、マクスウェルの人柄について述べ、彼の業績を讃えています。これらの講演は、“*JAMES CLERK MAXWELL, A Commemoration Volume 1831~1931*”と題する本となって出版されました。マクスウェルの学問がどれほどその後の自然科学の発展の重要な基盤となったか、また、彼の電磁波の理論が現代社会の形成にどんなに大きな意義を持つものか、改めて強く認識されるところです。

この生誕100年記念の講演会で、例えばマックス・プランクはマクスウェルの業績について次のように述べています。

“人間が自然を理解しようとして進んできた物理学は、二つの概念体系を基本的にもっていた。自然界が不連続で小さな粒子から成り立っているという考え方と、今一方では自然界は連続した媒質によって成り立っているという考え方である。それぞれ発展してきた二つの物理学の考えは、マクスウェルの時代に、はじめて、よりはっきりとそれぞれが特徴づけられた。それらは、それぞれ大体において物質の物理学とエーテルの物理学に対応すると言えるが、マクスウェルはその両方の分野で天才的な、新しくしかも大変意義のある考え方を導入して素晴らしい成果を挙げた。”

“一人の学者が思索によって、何世代も後になってやっと実験的に証明されるような自然法則を予言するということは、その人の心の中で描かれる全く個性的な像そのものが自然の法則と深い関係にあると考える限り、理解することはできない。……この成果は人間の知的営為の偉大な勝利として、いついつまでも輝き続けるものであろう。”

1871年、マクスウェル40歳のとき、ケンブリッジ大学の実験物理学の教授に就任した最初の講義で、彼は学生に次のように語りかけました。

“我々人間のする学問は、本来すべて人間についての学問である。理科系の学生がもし哲学、文学などの分野に現れる人間の素晴らしい感性というものから距離をおいたのでは、とっても自然の真理の探求などということではできないだろうし、また文科系の学生が歴史について研究する時にも、人間が自然について探求してきた中で生まれたいろいろの考え方、自然観のその時代への反映を抜きにして、人間の歴史は学べないだろう。”

“どんな分野であろうとも、どんな専門からの思索であろうとも、真理を探求しようとする人の心が互いにふれあい通い合うとき、それぞれがより高い水準で真理に向かって近づいていればいるほど、より強い心の結びつきが可能である。”

マクスウェルは、また、エッセイの中で次のようにも書いています。

“人々は法則を暗記し、指を折って計算する。一体そういう人々はいつ考え始めるのだろうか。やがて実際の生活が始まる。その時それらの人々は何をすることができるのだろうか。ただただ前例を重んじて、人の道のあとを追ひ、道しるべを頼りに進むだけなのだ。”

本学の大学院のそれぞれの研究科において自由な研究と思索の日々を送り、修士の学位を取得された諸君。さらに研究の道を進め、学者としての将来を目指す者もあり、あるいはまた社会に出てそれぞれの分野でこれまでの大学生活とは違った環境の中で第一歩を踏み出す人もあります。しかし、いずれにしても今や自らの道を自ら歩むことになります。これから、一人ひとりの自由な考え方、個性的な行動こそが変動を進歩と成熟へと導く力となる時代と考えます。諸君のそれぞれの道での生き甲斐のある充実した人生を心から期待して、諸君を送るはなむけの言葉とします。

参 考 文 献

“JAMES CLERK MAXWELL, A Commemoration Volume 1831~1931”, Cambridge University Press, 1931.

“The Clerk Maxwell Centenary Celebrations”, NATURE, No. 3232, Vol. 128, pp. 604~608, 1931.

James Clerk Maxwell; “A Treatise on Electricity and Magnetism”, Vol. I, Vol. II, Third Edition, Constable and Company Ltd., London, 1891; Dover Publications, Inc., New York 1954.

カルツェフ著、「マクスウェルの生涯」(早川光雄、金田一真澄訳)、東京図書株式会社、1976.

卒業式における総長のことば

平成2年3月24日

総 長 西 島 安 則

諸君、卒業おめでとう。

本日ここに歴代総長、名誉教授の多数の先生方の御臨席を賜り、部局長の先生方、教職員の皆さんと共に平成元年度の卒業式を挙行し、意気盛んな諸君を京都大学卒業生として世に送り出すことができるのは、本学の最も大きな慶びであります。

ただ今、文学部208名、教育学部72名、法学部332名、経済学部230名、理学部280名、医学部115名、薬学部80名、工学部835名、農学部287名、合計2,439名の諸君に合格証書を授与することができました。ここに、諸君は世界の中の学問の府、京都大学を立派に卒業することができました。これまでの学習の年月を陰になりひなたになって支えてくださった御家族、諸君の成熟の一つひとつの段階で、時に厳しく時に暖かく、諸君を導いてくださった先生方、また諸君のこれまでの人生を楽しく豊かなものにし、励ましあった諸君の友人達に、諸君と一緒に心から感謝したいと思います。

京都大学は明治30年（1897）に創設されました。今年は間もなく創立93周年の誕生日を迎えます。この間、本日卒業される諸君を含めて、本学を巣立った卒業生の数は12万8,561名となりました。この94年の歴史は決して坦々たるものではありませんでした。しかし、その中で本学は常に高い学問の水準を求め、自由な教育研究の場として独特の学風を培いつつ、社会の広い分野や学問の世界で活躍される多くの個性的な先輩の貢献によって、世界の中の学問の府としての基盤を固め、やがて創立100周年を迎えることとなります。

諸君の中で医学部の諸君は6年の課程を修めましたが、その他の学部卒業生の大部分は、4年前、私が総長就任後の最初の入学式で迎えた入学生であります。その入学式（昭和61年4月11日）で私は、ちょうどその年に地球に最近接して遠い宇宙へ去って行ったハレー彗星のことから、天文学者ハレー（Edmund Halley, 1656～1742）とニュートン（Isaac Newton, 1642～1727）の出会いと学問の継承について話しました。そして「稚心を去れ」という言葉で諸君の京都大学での充実した学生生活のはじまりを激励しました〔『京大広報』No.310, 1986. 4. 15〕。それから早や4年経って、今日は晴れの卒業式を迎えました。

この4年間の世界の動きは激しいものです。諸君を迎えた1986年（昭和61年）の秋、私はモスクワの大学とアカデミーを訪問し、その後、ポーランド、チェコスロバキアの大学やアカデミーを訪ねる機会を持ちました。それはちょうどゴルバチョフ（1931～）がペレストロイカを本格的に表明した年でした。しかし、ペレストロイカという言葉自身が意味するもの、そしてそのことがそれからどのような変化を引き起こすかということについても、まだ本当にはわからない時でした。少なくとも、東欧の大学

人との間での打ち解けた会話の中では、まだベレストロイカという言葉に明るい希望を一方で感じながらも、むしろその現れ方に対する不安が多く語られていました。

そして、私はこの4年間にヨーロッパの国々を国際会議などの機会に訪れる度に次第に確かな動きを感じました。最初は、少なくとも大学間の関係や国際共同研究の進め方という面では、東と西のヨーロッパの関係よりも、1992年を目標とした西ヨーロッパでの統一がより強い関心事であり、それに基づく具体的な構想が語られていました。

しかし、一昨年から、事態の動きは一段と加速されてきました。一昨年の秋イタリアのボローニャ大学の創立900年を記念して開かれた大学長会議では、世界の大学が集まって改めて学問の自由、大学の自治の宣言がなされました。昨年の秋、ドイツ、そして冬のはじめにノルウェーで国際会議があり、今年に入って2月のはじめにスイスで国際会議があり、それぞれ出席しました。ベルリンの壁が取り払われ、さらに多くの人々の予想を超えた速さで東西両ドイツの統一のスケジュールが論じられるようになった今日、これまでの東と西、といった図式で国際関係を論じることはできなくなりました。そしてヨーロッパでの変動、コンチネンタル・ドリフト、あるいは地殻変動とも言われる大きな動きから生じたエネルギーは、将来についての多くの課題に地球規模という言葉が自然に出てくる発想の転換を世界中に生じさせています。

このような背景の中で巣立つ諸君に、ちょうど今から60年余り前、中国の将来に心を砕いた詩人、魯迅(1881~1936)の詩について話してみたいと思います。

激動の時代と呼ばれる時を生きる一人ひとりの人生は、希望と絶望の交錯であります。魯迅の散文詩集『野草』に、次のような詩があります。

「絶望の虚妄なる 正に希望と相同じ」

〔絶望之為虚妄，正与希望相同〕

この詩は1927年(昭和2年)に出版された『野草』の中に収められている「希望」の一節ですが、魯迅は彼が愛好していたハンガリーの愛国詩人ペテーフィ・シャンドール(Petőfi Sándor, 1823~1849)の歌からとして、この詩を詠んでいます。このペテーフィは1840年代にハンガリーの革命運動に入り、25歳で青年ハンガリー党のリーダーとなり、独立戦争に従軍して若くして散った抒情詩人です。

吉川幸次郎先生(本学名誉教授, 1904~1980)は、魯迅のこの詩「絶望の虚妄なる 正に希望と相同じ」について次のように書いておられます。

“希望はしばしばむざんにうらぎられる。希望によって生まれる幻影がそのままに実現することはまずない。つまり、希望は虚妄である。

絶望がそこに生まれる。

しかし絶望によって生まれる幻影もまた、そのままの形で未来の現象となることはない。しからば絶望もまた虚妄である。その虚妄であることは、まさしく希望とあいひとしい。

言葉そのものの意味は以上のように読める。”

ここに、「虚妄」とは、実のないものを「虚」と言い、真に反するものを「妄」と言います。

魯迅が『野草』の中に収めた、この詩には1925年（大正14年）1月1日と日付がついています。今から65年前、魯迅44歳のときに書いたものです。

魯迅は1881年（明治14年）浙江省紹興府に生まれました。長江の下流、風光明媚の地で彼は穏やかな楽しい幼年時代を送りましたが、その頃中国は1840年（天保11年）からのいわゆるアヘン戦争以来、政治的に経済的に列強の侵略を受け、次第に窮迫した状態はその限界に近づいていました。

彼が12歳のとき（1893年）、彼の家庭にも急変があり、楽しい幼年時代はたちまち窮乏の生活の中に終わりました。そして間もなく（1894年）、彼の父が突然吐血をして病床に倒れ、彼は毎日質屋と薬屋に通うことになりました。当時のことを後になって彼は次のように述懐しております。

“私は私の背の倍の高さもある質屋のカウンターの上に衣服や首飾りを差し出し、侮蔑とともにいくばくかのお金を受け取り、今度は薬屋に行ってカウンターの上にそのお金を出して、久しく思っている父のために薬を買いに行くのだった。しかし父の病いは結局、日に日に悪くなって亡くなってしまった。”

彼の父が亡くなったのは、彼が15歳の時でした。魯迅が漢方医に不信を抱き、後に日本に留学して西洋医学を学ぼうと志した原因の一つは、ここにあったのです。

それから2年後、1898年、首都北京では戊戌政変が起こりました。その年彼は18歳で南京へ遊学しました。立憲君主体制を目指し、維新を求めて熱気にあふれた100日間も、袁世凱（1859～1916）の寝返りによる西太后（1835～1908）の反撃であえなく終わりましたが、しかし時代はすでに大きく動いていました。清朝はその末期的な症状を呈していました。

1902年（明治35年）、魯迅21歳の時、彼は中国の国費留学生として日本に来ました。そして1909年（明治42年）まで7年余り、最も多感な時を日本で過ごすことになりました。

最初仙台医学専門学校で医学の勉強を志しました。その頃の日本は日清戦争以来、中国に対する優越感の風潮が強く、彼には随分つらいことも多かったと思われます。また、当時、東京周辺には清朝政府によって祖国を追われた康有為（1858～1927）、孫文（1866～1925）、梁啓超（1873～1929）らが滞在し、中国革命の拠点の観がありました。魯迅はやがて医学の勉強を捨ててこの革命運動の情勢の中にその身を置くことになりました。彼は1903年に自ら弁髪を切ってその意志を表明しています。その頃の彼が親しい友人に送った手紙に、次のような詩を書いて決意を述べています。

霊台神矢を逃るに計なく
風雨磐の如くして故園黯し
意を寒星に寄するも荃は察せず
我、わが血を以て軒轅に薦めん

日本に留学して受けた激しい刺激、彼の心の痛み、そしてはるかに望む故国の風雨荒れ狂う危機を憂い、そして故国の同志を期待するが、心の通じないのを嘆き、自分は漢民族の神に自分を生け贄にしても故国を救い、革命を成就させようという心情を吐露した詩であります。

彼22歳の時です。

帰国後、教員生活に入り、傍ら文芸活動を行いました。彼は文芸を通して人々の性格を変え、社会を

改造することから始めるという希望を持っていました。やがて1911年（明治44年）10月、武漢に上がった狼火は辛亥革命として全土に広がり、清朝政権は倒れ、中華民国軍政府が成立しました。そしてその年の暮、孫文は臨時大総統に選ばれ、その翌年1912年（明治45年）1月1日、中華民国が成立し、南京が首都となりました。中国人はこの辛亥革命を「光復」と呼びました。しかしこの新しい希望を人々に抱かせた革命も、間もなく孫文が袁世凱に追われて、3月には袁世凱が大総統に就任しました。再び人々は希望の虚妄なること、絶望を味わうこととなりました。

「絶望の虚妄なる 正に希望と相同じ」というのは、こういう状況の中で書かれたものです。

先程述べた吉川幸次郎先生は、まだ第三高等学校3年の時、中国文学を研究しようと中国へ行かれました。1922年（大正11年）でした。中国で中国文学の研究者になる意志を固め、京都帝国大学文学部に入学されました。魯迅がこの詩を発表した1925年（大正14年）には、吉川先生は卒業論文を書いておられる頃でした。そして大学院へ進学して間もなく、北京に留学し、長く中国におられました。その頃魯迅は文芸活動をしていました。『野草』が出版された頃も、吉川先生は中国におられ、その時代の若者として時代の動きを身をもって感じておられたと思います。

魯迅は『野草』をまとめるにあたって、「題辭」を書いています。その中に次のように言っています。

“私は私の野草を愛する。だが野草を装飾とする地を憎む。”

“地火は地中を運行し、奔騰する。熔岩ひとたび噴出すれば、一切の野草と、および喬木とを焼きつくす。こうして腐朽するものさえなくなる。”

“私は私の野草を愛する。だが野草を装飾とする地を憎む。”この言葉は胸を刺します。社会の歴史の中で希望を持っていじらしく咲いた野草が、どれだけ焼きつくされてきたでしょう。また、幾度そのことが繰り返されてきたでしょう。

今また起こりつつある激しい世界の動きの中で、地殻変動にもたとえられるような大地の動きが、今度はその上に野草の希望を単に装飾として、やがて絶望へと焼きつくすことがないように念じます。そして、そのことは、力でなく、人間の知性によって為し遂げられる真の変革によってのみ、はじめて成し得るのではないのでしょうか。

京都大学で身につけた自由の気風と、そしてしっかりとした知的営為の成果を、諸君がこれからのそれぞれの人生の中でさらに逞しく磨きあげていくことが、諸君の人生の真の希望に、そして、世界の希望につながるものと私は信じます。諸君の充実した人生を心から期待して、卒業をお祝いする私のことを終わります。

参 考 文 献

「野草」、竹内 好個人訳、「魯迅文集」第二巻、筑摩書房、1987。

生島遼一、興膳 宏編、「吉川幸次郎集」、現代の随想14、彌生書房、1982。

高田昭二著、「魯迅の生涯とその文学」大明堂、1982。

<大学の動き>

平成元年度修士学位授与式

3月23日（金）午前10時から、平成元年度修士学位授与式が、本学総合体育館で挙行された。

学位授与式は、名誉教授はじめ来賓の臨席のもとに行われ、学位記授与、「総長のことば」があって午前10時50分終了した。

本年度の修士課程修了者は、文学研究科62名、教育学研究科18名、法学研究科15名、経済学研究科21名、理学研究科161名、薬学研究科36名、工学研究科584名、農学研究科143名の計1,040名であった。

平成元年度卒業式

3月24日（土）午前10時から、平成元年度卒業式が、本学総合体育館で挙行された。

卒業式は、名誉教授はじめ来賓の臨席のもとに行われ、学歌斉唱（京都大学音楽部交響楽団、京都大学合唱団が協力）、学士試験合格証書授与、「総長のことば」のあと、「蛍の光」を斉唱して、午前11時終了した。

新学士は、文学部208名、教育学部72名、法学部332名、経済学部230名、理学部280名、医学部115名、薬学部80名、工学部835名、農学部287名の計2,439名であった。

部 局 長 の 交 替 等

文学部長

岡 照雄文学部長の任期満了に伴い、その後任として朝尾直弘文学部教授（国史学第二講座担当）が4月1日任命された。任期は平成3年3月31日までである。

教育学部長

稲葉宏雄教育学部長の任期満了に伴い、その後任として柴野昌山教育学部教授（教育社会学講座担当）が4月1日任命された。任期は平成4年3月31日までである。

農学部長

岩井 保農学部長の辞任に伴い、その後任として、久馬一剛農学部教授（土壌学講座担当）が4月1日任命された。任期は平成4年3月31日までである。

農学部附属演習林長

武居有恒農学部附属演習林長の任期満了に伴い、その後任として和田茂彦農学部附属演習林教授（森林計測学担当）が4月1日任命された。任期は平成4年3月31日までである。

教養部長

新田博衛教養部長の任期満了に伴い、その後任として山崎和夫教養部教授（物理学担当）が4月1日任命された。任期は平成3年3月31日までである。

化学研究所長

高浪 満化学研究所長の任期満了に伴い、その後任として作花濟夫化学研究所教授（窯業化学研究部門担当）が4月1日任命された。任期は平成4年3月31日までである。

胸部疾患研究所長

大島駿作胸部疾患研究所教授（環境生態学研究部門担当）が4月1日胸部疾患研究所長に再任された。任期は平成3年3月31日までである。

木材研究所長

樋口隆昌木材研究所教授（リグニン化学研究部門担当）が4月1日木材研究所長に再任された。任期は平成3年3月31日までである。

基礎物理学研究所長

西島和彦基礎物理学研究所長の任期満了に伴い、その後任として長岡洋介基礎物理学研究所教授（物性論研究部門担当）が4月1日任命された。任期は平成4年3月31日までである。

経済研究所長

杉本昭七経済研究所長の任期満了に伴い、その後任として佐和隆光経済研究所教授（数量産業分析研究部門担当）が4月1日任命された。任期は平成4年3月31日までである。

東南アジア研究センター所長

石井米雄東南アジア研究センター所長の任期満了に伴い、その後任として矢野 暢東南アジア研究センター教授（統合環境研究部門担当）が4月1日任命された。任期は平成5年3月31日までである。

大型計算機センター長

長尾 真大型計算機センター長の任期満了に伴い、その後任として長谷川利治工学部教授（論理システム講座担当）が4月1日任命された。任期は平成4年3月31日までである。

放射性同位元素総合センター長

藤原元始放射性同位元素総合センター長の任期満了に伴い、その後任として加藤幹太理学部教授（放射線生物学講座担当）が4月1日任命された。任期は平成3年3月31日までである。

環境保全センター長

真嶋 宏環境保全センター長の任期満了に伴い、その後任として東村敏延工学部教授（高分子合成講座担当）が4月1日任命された。任期は平成4年3月31日までである。

情報処理教育センター長

長谷川利治情報処理教育センター長の任期満了に伴い、その後任として山田善一工学部教授（耐震工学講座担当）が4月1日任命された。任期は平成4年3月31日までである。

アフリカ地域研究センター長

伊谷純一郎アフリカ地域研究センター長の任期

満了に伴い、その後任として田中二郎アフリカ地域研究センター教授（乾燥帯生態系研究部門担当）が4月1日任命された。任期は平成4年3月31日までである。

保健管理センター所長

小川隆三保健管理センター教授（内科学専門）が4月1日保健管理センター所長に再任された。任期は平成4年3月31日までである。

学 生 部 長

佐野哲郎教養部教授（英語担当）が4月1日学生部長に再任された。任期は平成3年3月31日までである。

平成2年度医療技術短期大学部 入学試験の結果

医療技術短期大学部では、平成2年度入学試験を3月4日（日）・5日（月）に実施し、その合格者氏名を16日（金）に発表した。

受験者数及び合格者数等は次表のとおりである。

学 科	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数
看護学科	80人	237人	196人	89人
衛生技術学科	40	278	236	44
理学療法学科	20	144	123	20
作業療法学科	20	77	66	25
計	160	736	621	178

（医療技術短期大学部）

平成元年度医療技術短期大学部 の卒業式・修了式

医療技術短期大学部では、3月17日（土）午前10時から、本短期大学部講堂において来賓の臨席のもとに、短期大学部卒業式及び修了式を挙行了。式は卒業証書・修了証書授与、学長式辞、来賓祝辞と進行し、午前11時終了した。卒業生は、看護学科75名、衛生技術学科32名、理学療法学科16名、作業療法学科17名で、修了生は、専攻科助産学特別専攻19名の計159名であった。

（医療技術短期大学部）

平成2年度入学者選抜学力試験の結果

平成2年度入学者選抜学力試験（第2次学力検査）の前期日程試験は、2月25日（日）・26日（月）に、後期日程試験は、3月14日（水）・15日（木）に実施した。

学部別の受験者、合格者数及び入学者数等は次表のとおりである。

学 部	(A) 募集人員	(B) 志願者数	(C) 倍率 (B/A)	(D) 第1段階選 抜合格者数	(E) 受験者数	(F) 倍率 (E/A)	(G) 欠席者数	(H) 欠席率 (%)	(I) 合格者数	(J) 追加合 格者数	(K) 入学者数
文 学 部	220人										222人
前期	190	625	3.3	618	613	3.2	5	0.8	193		
後期	30	517	17.2	216	93	3.1	123	56.9	33		
教育学部	60										68
前期	40	146	3.7	145	142	3.6	3	2.1	47		
後期	20	151	7.6	151	96	4.8	55	36.4	21		
法 学 部	400										405
前期	340	1,031	3.0	1,030	1,018	3.0	12	1.2	344		
後期	60	724	12.1	521	214	3.6	307	58.9	70		
経済学部	250										260
前一般	150	526	3.5	526	518	3.5	8	1.5	157		
期論文	60	765	12.8	270	266	4.4	4	1.5	64		
後期	40	506	12.7	257	110	2.8	147	57.2	46		
理 学 部	306										306
前期	276	1,283	4.6	1,257	1,241	4.5	16	1.3	276	1	
後期	30	1,376	45.9	1,346	945	31.5	401	29.8	30	1	
医 学 部	100										99
前期	90	439	4.9	405	397	4.4	8	2.0	91		
後期	10	207	20.7	199	123	12.3	76	38.2	10		
薬 学 部	80										89
前期	60	174	2.9	174	168	2.8	6	3.4	67		
後期	20	145	7.3	145	73	3.7	72	49.7	27		
工 学 部	1,040										1,041
前期	626	2,098	3.4	2,029	2,021	3.2	8	0.4	626		
後期	414	2,757	6.7	2,740	1,714	4.1	1,026	37.4	427		
農 学 部	325										334
前期	260	778	3.0	778	765	2.9	13	1.7	277		
後期	65	551	8.5	550	312	4.8	238	43.3	69		
小 前期	2,092	7,865	3.8	7,232	7,149	3.4	83	1.1	2,142	1	
計 後期	689	6,934	10.1	6,125	3,680	5.3	2,445	39.9	733	1	
計	2,781	14,799	5.3	13,357	10,829	3.9	2,528	18.9	2,875	2	2,824

(注) 1. 受験者数・欠席率は最終教科のものである。

2. 法学部（後期）と経済学部（後期）には、外国学校出身者のための選考試験の志願者69名と45名、第1次選考合格者36名と18名、受験者30名と16名、欠席者6名と2名、合格者20名と7名、入学者14名と1名がそれぞれ含まれている。

経済研究所 青木昌彦教授が 日本学士院賞を受賞

このたび、経済研究所 ^{あおき まさひこ} 青木昌彦教授に日本学士院賞が授与されることになった。授賞式は、6月上旬、日本学士院会館で行われる予定である。

以下に同教授の略歴、業績等を紹介する。



青木教授は東京都出身、昭和37年東京大学経済学部卒業後、同大学院修了の後、同39年米国ミネソタ大学経済学部助手、同42年スタンフォード大学経済学部助教授、同43年ハーバード大学経済学部助教授を経て、同44年京都大学経済研究所助教授となり、同52年教授に昇任した。その後、ハーバード大学及びスタンフォード大学客員教授、スウェーデン社会科学高等研究所フェローとして招かれ、平成2年1月からは、スタンフォード大学経済学部ヘンリ・アンド・トモエ・タカハシ寄附講座の教授として渡米中である。

教授の今回の受賞の対象となった業績は、英文で発表された *The Cooperative-Game Theory of the Firm* (Oxford University Press, 1984) と *Information, Incentives, and Bargaining in the Japanese Economy* (Cambridge University Press, 1988) の二書である。教授は早くから、数理的方法を駆使して、比較経済制度分析の開拓に取り組んできた。初期の業績には『組織と計画の経済理論』（1971年日経図書文化賞）があり、その基礎となった英文論文は早くから国際的な注目をあつめた。受賞の対象となった第一書は、そうした比較分析の研究をさらに企業の理論として具体化したものである（その日本語版は『現代の企業—ゲームの理論から見た法と経済』として出版され、1985年のサントリー学芸賞を受賞している）。とくに、同書では協調ゲームの理論を応用することによって、近代経済学では通説となっている利潤最大化仮説や、いわゆる『所有と経営の分離』という現象に注目した経営主義理論、さらには従業員主権仮説の理論のいずれをも、特殊なケースとして含む統合的理論を展開することに成功した。そして、英米独日などの企業の法的仕組みの

差異にもかかわらず、現代企業の本質を統一的に把握する道を開き、国際的にも高く評価された。

受賞の対象となった第二書では、日本企業の諸相を分析するのに情報理論、インセンティブの理論、ゲームの理論といった1970～80年代に国際的に目覚ましい発展を遂げた理論枠組みを用いつつも、それぞれに欧米企業のモデル化におけるのは異なったタイプを抽出・提示することによって、日本企業の特質と生産性を、学問的に理解する道を開いた。この分析はしかし、単に日本企業の国際理解に貢献するばかりでなく、企業の比較理論をさらに豊かにし、ひいては欧米系の企業や、社会主義企業の特質の理解にも連なるものと期待されている。スタンフォード大学の大学院では、これらの著作が刺激となって、現在教授の指導の下に、『比較企業・組織分析』という新しい専門分野の設立の準備が進められている。

教授は、国際計量経済学会理事・極東部会長をつとめ、また国際学術雑誌の *The Journal of the Japanese and International Economics* の編集長の任にもある。また経済審議会委員、科学技術会議専門委員、科学技術庁参与などを歴任している。さらに京都大学の協力によって、昨春秋に京都に開設されたスタンフォード日本センターの設立にも力を尽くし、同財団の理事をつとめている。

(経済研究所)

計 報

山 本 龍 男 名誉教授

本学名誉教授山本龍男先生は、3月16日に逝去された。享年73。

先生は、昭和16年京都帝国大学農学部を卒業後、本学化学研究所助手、高知大学農学部助教授、教授を経て昭和35年本学化学研究所教授に就任、同55年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を授与された。

先生の専門は微生物化学で、中でも微生物におけるアミノ酸代謝とビタミン B₆ 酵素、抗腫瘍性酵素、ニトロ化合物分解酵素の研究において数多くの優れた研究業績を残された。

これら一連の研究活動、学術上の貢献に対し、平成元年には勲三等旭日中綬章を授与された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(化学研究所)

〈紹介〉

埋蔵文化財研究センター

埋蔵文化財研究センターは、本学敷地内の埋蔵文化財に関する調査計画の立案，調査研究，保存及び成果報告の作成を行うことを目的として活動している。ここでは，近年，医学部・病院構内の調査で発見したおもなものの中から、『兵範記』（平安時代後期）や『明月記』（鎌倉時代）などに記された，福勝院に関係すると考えられる遺構や遺物について紹介する。

平安時代後期に兵部卿平信範の記した日記『兵範記』には，鳥羽法皇の皇后高陽院泰子が，仁平元年（1151）に創建した福勝院の記事がある。九体阿弥陀堂，寢殿，三重塔，鐘楼，護摩堂などについて記され，とくに9体の阿弥陀仏をまつた九体阿弥陀堂についてはその平面図が描き残されている（表紙図）。

この福勝院の位置は，泰子の葬送に際し，近衛末を東に向かい，福勝院の南門を入るという記事などから，京都大学の教養部の南部付近にあったと推定されている。『明月記』や『勘仲記』（鎌倉時代）などの記事から，鎌倉時代にも存続していたことが判り，寺院史を知る上で貴重な資料であるが，その正確な位置や規模などは不明な点が多く，これらを明らかにすることが，本センターが取り組んでいる課題のひとつである。

医学部構内南東部の放射性同位元素総合センター有機廃液処理設備室新営予定地では，平安時代後期の六器とその受皿の鋳型が数点出土した。六器は水や密を供える仏器であり，写真1の中尊の前に描かれている大壇などの4面を飾る青銅製密教法具のひとつである。六器の時期や出土位置から，福勝院に関連するものと考えている。また，医学部附属病院中央診療棟・臨床研究棟新営予定地では，2つの穴からコンテナ80箱に及ぶ多量の土師器が出土したが（写真1），うち数点には墨書が施されていた（写真2，図）。口髭を表し歯をむき出しにした顔は，鬼神の類を表現するものであり，両面に描かれた蓮華文は仏器と関連し，これらの土師器が，祭祀に関わるものであることが窺われる。遺物の年代は12世紀後半であり，福勝院と重なる時期のものである。さらに，やや北よりの医学部附属病院内科系病棟及び内科系臨床研究棟新営予定地の調査では，10世紀から19世紀にかけての井戸31基を検出した。このうち福勝院が存在した12世紀から13世紀の井戸は26基で，その大半を占める。

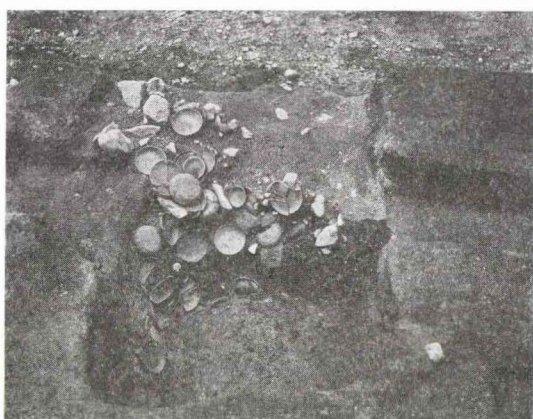
以上のような調査結果から，これらの場所が福勝院の寺域内であったことを示す証拠は欠いているが，寺院祭祀に関わる遺物が出土し，時代的一致する遺構が多数発見されていることから，寺域

の周辺を含めて，福勝院に関連する諸施設が存在していたことを示すものと考えている。

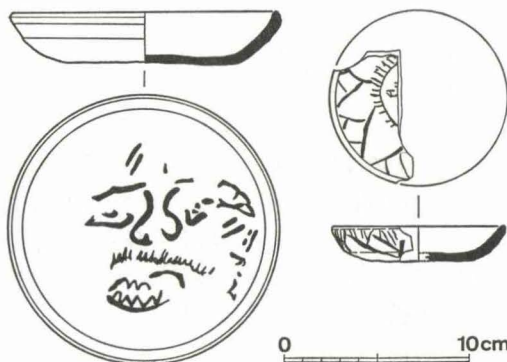
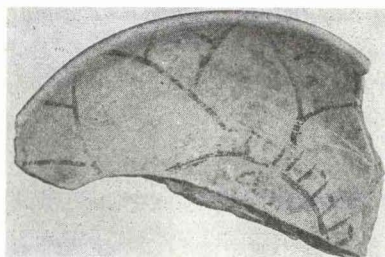
近年の発掘調査からその成果の一部を紹介したが，京都大学構内には吉田キャンパスのほか，高槻市の農学部附属安満農場や，和歌山県白浜町の理学部瀬戸臨海実験所などにも重要な遺跡がある。文化財保護法に定められた建物建設に伴う調査では，計画に支障のない方策をとるよう努力しており，この点への十分なご理解を願うとともに，調査活動に多大なご協力をいただいている関係諸部局にお礼申し上げる。

（埋蔵文化財研究センター）

（写真1）



（写真2，図）



<資 料>

平成元年度京都大学職員研修実施状況

大学における職員研修は、官職の職務の責任の遂行に必要な知識・技能等を修得させ、かつ職員の能力・資質等を向上させることを目的として実施するものである。

平成元年度における本学主催の職員研修実施状況については、次の表に掲げるとおりである。

なお、平成元年度職員研修の特色としては、新たに中堅職員研修が設けられたことにより本学の職員研修コースが9コースに充実したほか、技術職員研修の実施が年2回(7月、2月)となり、また、実務研修窓口の一本化により各系別研修が一斉に実施できたことなどが挙げられる。

研 修 の 名 称	実 施 期 間	対 象	受 講 者 数			研 修 場 所
			男	女	計	
新採用職員研修	4月19日～4月21日	新採用職員	26	8	34	経済学部特別講義室
主任研修(第7回)	5月17日～5月19日	主任(他機関を含む)	27(5)	7(0)	34(5)	関西地区大学セミナーハウス
〃(第8回)	11月8日～11月10日	〃	26(3)	9(2)	35(5)	国立若狭湾少年自然の家
監督者(係長級)研修	9月20日～9月22日	係長(他機関を含む)	23(5)	8(1)	31(6)	理学部附属瀬戸臨海実験所
技術職員研修(第2回)	7月18日～7月20日	行(一)教室系技術職員	44	1	45	附属図書館, 理学部, 工学部
〃(第3回)	2月13日～2月15日	〃	41	4	45	〃
中堅職員研修	1月30日～2月1日	事務系職員(主任除)	37	59	96	数理解析研究所
実務研修(庶務系)	11月29日～12月1日	庶務系事務職員	27	13	40	経済学部特別講義室
〃(経理系)	11月6日～11月8日	経理系事務職員	21	9	30	〃
〃(施設系)	6月7日～6月9日	施設系技術職員	19	0	19	〃
〃(〃)	10月25日～10月27日	〃	17	0	17	〃
〃(教務系)	10月17日～10月19日	教務系事務職員	23	16	39	学生部会議室

() 中は他機関の受講者数

平成元年度学生生活実態調査報告

学生部は厚生施策の企画・実施のための基礎資料を得るため、昨年11月にこの調査を行い、その集計結果を『学生生活実態調査報告』としてまとめた。

学生生活の現状に対して理解を深めるため、ここに参考として調査の概要を紹介する。

なお、本調査報告に関心のある者は、学生部厚生課厚生・生活掛、各学部教務掛(工学部は厚生掛)及び教養部厚生掛で閲覧されたい。

調 査 の 概 要

1 調査の目的

この調査の目的は、京都大学学生の主に経済生活の実態を把握し、有効適切な厚生施策を実施するための基礎資料を得ることである。この目的のために、昭和28年以来、全学的調査を毎年定期的に実施し昭和43年以降は、隔年ごとに実施してきた。このたびの調査はその第26回目にあたる。

2 調査の方法

(1) 企 画

平成元年9月の学生部委員会において調査の期日、対象、方法について実施上の細目を確定した。

(2) 調査期日

平成元年11月1日とし、調査票を標本学生に配布し、記入を依頼した。

(3) 母集団と抽出標本

調査対象は、平成元年10月1日現在における在学学生中、外国人留学生、休学者を除いたものである。母集団となる調査対象は次のとおりである。

学部男子学生	11,000名	大学院修士課程学生	2,086名
学部女子学生	1,416名	大学院博士後期課程学生	1,366名
計	12,416名	計	3,452名

合計 15,868名

抽出には例年のごとく層化無作為抽出法を採用した。大学院学生からは男女とも2分の1、学部男子学生からは10分の1、学部女子学生については2分の1の割合で抽出し、調査を行った。この結果から得られた標本数は3,534で全調査対象学生数15,868名の約22.3%にあたる。

調査結果の回収総数は2,423で標本数3,534からみると、回収率は68.6%となる。以下に標本学生数、回収数、回収率を示す。

区 分		項 目	標 本 学 生 数	回 収 数	回 収 率 (%)
学 部	教 養 課 程 男 子		505	295	58.4
	専 門 課 程 男 子		595	421	70.8
	全 学 女 子		708	456	64.4
学 部 合 計			1,808	1,172	64.8
大 学 院	修 士 課 程	文科系	114	85	74.6
		理科系	929	768	82.7
	博士(後期) 課程	文科系	143	80	55.9
		理科系	540	318	58.9
大 学 院 合 計			1,726	1,251	72.5
学 部 ・ 大 学 院 総 計			3,534	2,423	68.6

3 調査結果の要約

主 な 事 項			学 部 学 生	大 学 院 学 生
家 庭	家庭の所在地	京 都 府	8.7%	16.0%
		近畿地方(京都府下を含む)	52.7%	56.2%
	家計支持者の職業が俸給生活者		77.6%	69.9%
	家庭の全年収(平均値)		9,958,507円	8,595,693円
ア ル バ イ ト	過去半年間にアルバイトをした者		84.7%	79.7%
	使 途	衣食住, 勉学費に使用した者	44.1%	69.9%
		上記以外に使用した者	54.3%	29.4%
奨 学 金	受 給 し て い る 者		21.9%	62.0%
通 学	徒 歩		14.6%	22.9%
	自 転 車		40.9%	28.7%
住 居	自 宅 通 学 者		24.4%	23.0%
	京 都 市 内 居 住 者		80.2%	88.3%
勉 学	自 習 時 間		1.7時間	1.6時間
課外サークル	加 入 し て い る		76.7%	36.1%
収 入 月 額 (自宅外通学者)	家 庭 か ら (平 均 値)		84,400円	46,100円
	ア ル バ イ ト ・ 奨 学 金 (平 均 値)		38,100円	90,400円
	収 入 金 額 合 計 (平 均 値)		123,500円	139,100円
支 出 月 額 (自宅外通学者)	部 屋 代 (平 均 値)		31,700円	28,500円
	食 費 (平 均 値)		33,200円	38,200円
	勉学費・書籍費合計(平均値)		8,300円	13,100円
	支 出 金 額 合 計 (平 均 値)		125,900円	139,800円

注記 アルバイトの使途の割合は第一順位の数値を表記した。また、衣食住, 勉学費に使用した者と上記以外に使用した者の合計が100%にならないのは、無回答, 誤記入があるためである。(学生部)

